九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

大江健三郎『河馬に噛まれる』にみる多義的な人間と〈共生〉の道程 ： ポストヒューマンを図るために

林, 欣彤
九州大学大学院地球社会統合科学府 ： 博士後期課程二年

https://doi.org/10.15017/4783637

出版情報：九大日文. 39, pp.19-33, 2022-03-31. Association of Japanese Literature, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

大江健三郎『河馬に噛まれる』にみる多義的な人間と〈共生〉の道程

――ポストヒューマンを図るために――

林 欣彤（RIN Kintou）

一、問題設定

一九八三年一一月から一九八五年一〇月にかけて、『文学界』『へるめす』『新潮』に分載された大江健三郎の短編連作集の長編小説『河馬に噛まれる』は、核状況と障害児という公私両面の〈共生〉をともに意識し、かつそれをポスト戦後期の日本社会における重大な挫折と思われる連合赤軍事件と全共闘運動を題材とする。この小説におけるもっとも顕著な特異性といえば、ウガンダで河馬に噛まれた連合赤軍事件の元メンバーである「河馬の勇士」を契機とし、事件の還元と変容をとおして人間への捉え直しと時代への把握を披露するところである。

同時代評を見る限り、本作への解読は、事実と虚構の錯綜、文体的特徴、青年の再生という三つの断面によってなされたと考えられる。山田有策は事件に対する「文学的〈処理〉」に着目し、河馬のイメージを用いて短編連作をまとめることで〈奇〉の形を見せたと提示した[1]。それとほぼ同調で、「想像力による物語であって、現実を再現したものではあるまい」[2]、また河馬に噛まれるように「滑稽（こっけい）なばかげた事故としかみられまいが、噛まれた当人にとっては、どうしようもない生身の痛み、叫びうめきながら耐えるよりほかない苦痛」[3]といった指摘もある。この事件を表現するための文体的工夫といえば、作者自身を彷彿させるような文体を意識した論がたくさんある。たとえば、白川正芳は作品を「作者の声が直接とどく小説」、「私小説になるところを、翻訳調の文体と知識を駆使し、高度な知の生産物としている」[4]と評し、筒井康隆も「自己照射という大きな意図」を表現し、「意識的に笑いを追究する」[5]手法を述べた。

多く同時代評によれば、こういう作者自身の声によって際立たされたのは、革命で傷ついた青年たちの再生であるという。たとえば、竹田青嗣は、「当時「革命左派」が抱いた理想とその〈死〉を、現在に〈再生〉しようという強い情熱」を論じ、「〈死〉の不安を、社会あるいは世界の理想という「共同性」を梃子にして救済する」[6]という意味を捉えた。牛久保健男も「個が死んでも共同体が残れば無駄死にではない」と解釈し、「連合赤軍」の「再生」こそ「その死の意味を無意味から意味あるものへと「再生」できる」[7]と主張した。また、物語を「全共闘運動で傷ついた少年の再生の物語」[8]、「新しい若者の生き方を見いだした」[9]物語として位置づけた論もあった。

最近の先行研究は、こうした同時代評を一層発展し、独自な観点を示す傾向があるが、管見の限り、本作における〈共生〉の問題に触れたことがない。上村文人は山田有策と同じくとり

わけ事件との関係を取り上げたが、「連合赤軍事件という、「欠落部分のある、あるいは伝わる過程で歪まざるを得ぬメッセージを、いかに全体的に復原・修復してよく読みとるか、そのための能力をどうつくりだすか」という方法意識」に注目し、連合赤軍事件を「別の有り様」[10]で読者に示したいという本作の意図性を分析した。尾崎真理子は上述の白川や筒井と同じく文体に注意を払ったが、フィクションである連作の筋書きを「徹底してノンフィクションとして読まれるように仕組まれたメタフィクション」と、事件関係者の「行動を中継するように」[11]書く主人公の存在を説明した。

以上のように、本作を論じたい以上は、連合赤軍事件との関連性をあらゆる方面から捉えることは不可避的な一環だといえる。たしかに、事件関係者の青年たちについて、〈死と再生〉のテーマは繰り返して言及されて解釈されてきた。しかしなぜ事件を記録するために河馬という動物の表象を用いねばならないのか。本作が事件を物語化する際に、とりわけ事件における赤軍女性と作者の障害者息子と虐待された動物といった弱者を焦点化することは、弱者たちの権利を強調しているのではないだろうか。そうであるならば、先行研究が示した青年の再生は、これらの動物的他者を視野に入れて再考するときに、本作の生命倫理に対する解釈としてはやはり不十分であり、むしろ弱者をめぐる〈共生〉の意識へと発展すべきである。もう一方で、この作品が書かれた一九八〇年代における大江の言説を同時に考えると、人間を含めた核状況下のあらゆる生き物もまた弱者であり、弱者同士の〈共生〉を図るべきではないかという問題も浮上する。

以上の観点のもとで、本稿では、暴力の根源としての人間と弱者としての人間などの人間の多義性に基づいて、弱者との〈共生〉および弱者同士の〈共生〉を描き出す本作の仕組みを検討していきたい。まずは、河馬のイメージが本作においてどのように事件と関わっていくか、またどのような象徴性をもつかをきっかけに、赤軍メンバーたちへの追究に内在する事件との和解的志向を分析する。続いて、連合赤軍の女性隊員と作者の障害者息子といった弱者を庇護する語りを取り上げ、周縁化された弱者の人間の権利を主張する試みを読み解く。最後に、そういった経緯によって表現されてきた〈共生〉の意識について、一九八〇年代の核状況を踏まえて考察し、強き暴力の脅威的秩序に抑圧された生命に対して、核時代のエコクリティシズムから延長する批評の地平を開きたい。

二、多義的な人間との和解をめぐって

本節では、先行研究ですでに指摘された、連合赤軍事件を題材とした八つの短編をリンクしたうえで、緊密に統括している「河馬」の動物表象という記号の内包的意味合い、またそこから見えてきた事件との和解という作品の趣旨を見ていきたい。

作中でも明示されたように、深瀬基寛著『エリオット』におけるトーマス・スターンズ・エリオットの詩文の訳詩「河馬」から援用された「河馬」は、連合赤軍事件の経緯をあぶり出し、人間の限界性と生命力といった多義性を提示したい意図を呈して

いる。

僕もあらためて、深瀬基寛著『エリオット』で「河馬」のくだりを読む。そしていまほそみさんがどのような思い入れを、この詩に託しているか理解するように感じるのである。さきに引用した河馬と教会との対比を続けたのち、突然エリオットは次のように展開している。《河馬に羽生え湿地原より/天翔りゆくをわれは見た、/天使はまはりをとりまいて/神の讃美の合唱に余念がない。//「小羊」の血潮は河馬を洗ひ/天使のもろ腕、此奴を抱かん/聖人さまに仲間入りして/黄金の竪琴を掻きならさん。//雪の白さにさつぱり洗はれ/殉教の処女らは接吻せん、/真の教会は下界を根城にいつかな動ぜぬ、相ひも変わらぬ瘴気の霧に包まれながら。》

ここにあらわれているヴィジョンは、「河馬の勇士」のありようと、M・T氏の革命思想の「教会」と、愛らしく若い娘ほそみさんの役割とを、三者三様、端的に表現するものではないか？ほそみさんにしてみれば、当のヴィジョンを自分の身の上に引きつけて読みとらぬことが難かしいほどのものではないであろうか？[12]

上の段での訳詩の引用は、初版一九六八年一月の筑摩書房刊行の深瀬基寛著『エリオット』の訳詩「河馬」最後の三節そのままである。深瀬自身の解説では、エリオットの「河馬」という詩は、「前半においては河馬は一見頑丈に見えても生き身のもの、そのかたわら教会は厳のうえに毅然として立つ不動のものとして、ゆるぎなき教会を讃美しているようであるが、後半になると河馬は昇天するが、教会は下界で瘴癘の気に包まれたまま残っていると述べ、その奇抜な想像の大胆さで読者を驚かす」ものである。本作の第四章であり、短編連作集四番目短編である「河馬の昇天」のタイトルがエリオットの「河馬」後半から引用したイメージだと推定できると同時に、作中の連合赤軍事件の脈絡もこの詩文の内容に相即して繰り広げられている。具体的にみれば、「河馬の勇士」をはじめとする赤軍メンバーが入獄し、詩文中の「昇天」を果たすときに、連合赤軍に擁護された「革命思想の「教会」」は崩壊を迎えることになることである。

そこで、連合赤軍の「革命思想」と「教会」の宗教イデオロギーが同一化され、ともに人間の限界性を示すことを確認してみよう。エリオットが描いた「教会」が既成価値に安住し切るせいで、批判の俎上に載せられると類似的に、連合赤軍の「革命思想」も極めて限界性を露出したことは、指導者M・Tが自死する前に赤軍同士への手紙における自己反省から読み取れる。作中で引用されたM・Tの自己反省の内容[13]は、現実の連合赤軍指導者森恒夫が自死する前に書いた、最後の坂東国男宛の書簡によるものである。[14]森は坂東への書簡において、「権力への敗北」を、「反プロレタリア的、反マルクス・レーニン主義的イデオロギーの純化からの必然的思想的解体」だと帰結し、彼自身の「余りのハレンチさ、傲慢さ」を反省し、「自己嫌悪と絶望」[15]の感覚を披露した。作中では、連合赤軍の「革命思想」は訳詩「河馬」における「教会」のイメージに仮託され、その聖性に隠蔽された欺瞞

性を露呈した。

一方で、M・Tの「革命思想」が代弁する「教会」との「対比」として、同じ元連合赤軍メンバーの「河馬の勇士」は詩中の「河馬」に擬せられ、人間の生命力を象徴する。処刑された赤軍メンバーの妹である石垣ほそみによると、エリオットの詩のなかの「河馬」を「The Hippopotamus」という定冠詞つき大文字で表す書き方は、「河馬の勇士」を噛んだ特定の河馬を指し示す読み方を提示している。ほそみは、生き延びた「河馬の勇士」を「水のなかを猛然と泳いでいる河馬の眺め」と重ね合わせ、「つまり The Hippopotamus は、あなた自身のことでありうる」と語り、「河馬の勇士」と「河馬」の生態を同定しようとしている。つまり作中では、連合赤軍の「革命思想」がもたらす死の結果と相対的に、「河馬の勇士」は生の希望を現出するものとして設定されているのだ。ここでは、現実世界の連合赤軍を統御する「革命思想」の負性を、物語世界で創出した「河馬の勇士」という仮想の赤軍メンバーによって解消し、動物の生命力を内包する人間の「生き方」を模索しようとする意図が垣間見えるだろう。

以上から明白になったのは、作者の大江はむろん現実の事件をとおして人間の暴力的な一面、その思想的な限界性とそれによってもたらされた消極的な結果に気づき、そして作品において詳しく詩文のイメージをもって投影したが、ただひたすら否定して批判するのではなく、むしろ物語化をとおしてこうした限界性のなかでメンバー一人の生命力という積極的な一面を発見しようとし、多義的な人間の本質と和解的な姿勢を示している。そういう姿勢は作中のもう一人の登場人物であるタケチャンに対する描写からも分かる。

> タケチャンは、死ぬ前の肉体的な苦痛をなにより恐怖していた人でした。キイッチャンを殺す時と、自分が癌で死ぬ時と、タケチャンは死ぬ前の肉体的な苦痛の怖しさを、二度経験したことになるのじゃないでしょうか？それが可哀相で憐れでなりません……（中略）殺す人間が、殺される人間と同じ死の苦痛を味わう、そんなばかなことがあるものかと……しかしタケチャンはそういう人間ではなかったでしょうか？[16]

タケチャンは、もともと「セックスの偏執家」であり、「僕」とホモ的な関係を保ちつつ、「僕」と同じ女性を共有し、大学闘争の神話的人物として数えられるが、そんな性的規範に囚われない屈託もなく、党内でも多数派代表者の人物でもある。性的に積極的なタケチャンは肉体の快楽を堪能したものの、「肉体的な苦痛をなにより恐怖していた人」であり、それと同時に、彼は組織の政治的な構想の統率者であり、「政治的な具体性、戦術性、戦略性」を原理的に指導する者でもある。そういうタケチャンから、先行研究で指摘された大江作品における〈性的人間〉と〈政治的人間〉の特徴が見える。ブシマキ・ハジムが論じたとおりに、この両者への関心は大江の小説作品『セヴンテーン』（一九六一年一月）『政治少年死す』（一九六三年五月）「性的人間」（一九六三年九月）やエッセイ集『厳粛な綱渡り』[17]（一九七五年六、七月）に所収された六〇年代のエッセイ群から容易に推察できる。多

くの先行論を踏まえたハジムの論では、大江作品における〈性的人間〉と〈政治的人間〉は「対立と闘争の過程を通じて発展的に統一する」といういわば〈止揚〉関係にあり、「互いを必要とし」、静態的ではない「移動」している状態に置かれている[18]。

だが、こうした〈性的人間〉と〈政治的人間〉に対する検討は、「統一」といいながらも突き詰めたところで、両者を分立させ、その関係への考察だと見なされる。そうだとすると、この両者の統合体だと見なされてきた人間の実態はいったい何なのか。この問題意識をもって、「河馬」の記号で貫かれた本作を読み直すと、動物を擬態する人間の有り様、さらにいえば政治的動物としての人間の実相が浮かび上がるのではないかと考えられる。ここでディネシュ・J・ワディウェルの「政治的動物」論にかかわせてみたい。ワディウェルはアリストテレスの解釈をもとに、「動物生命から切り離された超越的存在ではなく、追加の能力によって他の動物生命を超える一動物」としての人間の位置づけを提起した。その見方によれば、「人外の動物と人間という動物の《溝》は、便宜（ないし合理性）と正義に関係する原則を言葉にできる能力の有無にあり、この溝が事実上、政治学の意味、少なくとも「人」の手で完成されるそれの意味を規定する」[19]という。すなわち、「政治的動物」という概念は、人間の基盤を動物に置くという点で人間の動物性を承認しつつ、政治性という「追加の能力」によって超越性を帯びる点で、人間の多義性を裏付けたといえる。

「僕」が連合赤軍メンバーを語る以上、その政治的な一面に注目せざるをえない。キイッチャンを処刑するタケチャンに対する叙述も上述のM・Tと同質的だといえる。だが、「僕」がとりわけタケチャンが「キイッチャンを殺す時と、自分が癌で死ぬ時」の、「死ぬ前の肉体的な苦痛の怖しさ」を強調し、「それが可哀相で憐れでなりません」と、同情な視線で評価を与え、タケチャンをめぐる人間の生命を凝視している。そういう人間たちは、たとえ政治的な一面をもったとしても、やはり生死の宿命から逃れきれない。それは、「河馬の勇士」に対する描写によって表現された動物と共有する属性と一貫しているだろう。本作はこうして人間の政治的動物としての側面を炙り出し、そこから連合赤軍事件との和解を図ろうとする。そういう和解は、複層的な理解に基づく人間自身の多義性との和解でもある。次節はこういう結論を踏まえつつ、さらに事件と人間の強弱の序列との関連性に触れていく。

三、弱者を庇護する〈共生〉の意志

こうして「河馬」の表象をとおして、生命に対する探求を一貫にして施した本作は、人間社会における弱者たち、とりわけ連合赤軍女性、障害者息子と動物の生き様に注視している。

まずは赤軍女性について、「僕」は赤軍の山岳ベースでの武闘訓練にかかわる女性たちを想起し、その「不幸な亡くなり方同様に不幸な生き延び方」をした、妹同然の女性タカチャンへの思い出話を語り始める。

そしていま僕は、シルクロードの西陽が柔かく照りわた

らせる交河故城の土塁の上に立ち、河岸段丘の谷底を眺めわたし、このトバくちを通り抜ける道さえ見つければ、タカチャンが正気と健康を恢復している時と場所、さらには汚辱と恐怖と絶望のうちに殺された娘たちの、死そのものが正しく、かつ人間的に美しく、殺した者・殺された者ともに、意味のある生き方をつらぬいたと証明されている、そのような時と場所が実在しており、娘たちは清らかによみがえってさえいるのであって、その安らぎの土地からあおぎ見れば、ほかならぬ自分こそ凶まがしい雲間の鬼さながらこの土塁に立って、担っている苦しみから自分を解きはなちえずにいるのだろうと、そのような夢想の段階に到っていた。[20]

ここの「僕」の語りは、「汚辱と恐怖と絶望のうちに殺された娘たち」の「死」を「正しく、かつ人間的に美しく」と弁護し、事件の批判に執着するより、「殺した者・殺された者ともに、意味のある生き方をつらぬいた」と、彼女らの「清らか」さと「安らぎ」を願う。現実の連合赤軍女性について、上野千鶴子は彼女らの「加害と被害の二重性」、つまり暴力を振るうと同時に、性差別の暴力をも受けている側に立つことを述べた。「非正統化された対抗暴力」を行使する女テロリストである一方で、党内の激しい「ミソジニー（女性嫌悪）」が原因で、一部のメンバーは強姦を受けたり子供を中絶されたりした[21]。こういうミソジニーは、男による「他者嫌悪」と女自身の「自己嫌悪」の両方を意味している。そして、彼女らの実体験によって反映された加害と被害の錯綜した状況は、リブ（女性解放）とフェミニズムの問題とつながり、持続的に検討されつづけている。

つまり、赤軍女性はいくら対外的に侵略性を示したとしても、党内では紛れもなく弱者であり、そしてそれは他者による排除だけでなく、内発的な認識にもよるだろう。だが、本作の語り手であり、この事件を記録する書き手でもある「僕」は、赤軍女性の現実的な負性をいったん棚に上げて、赤軍女性の格闘と結末を美学的なレンズで濾過したと見える。そのために、男性である「僕」自身を「凶まがしい雲間の鬼」にすら喩え、彼女たちの女性としての聖性を際立たせて表現しようとする。それが自分を解放しようとする「夢想の段階」だと自覚したとしても。

他方で、障害者の息子に対するタケチャンの言い分に対する「僕」の抵抗は、いっそう弱者への庇護を強化したように読み取れる。タケチャンは、「僕」が「畸型のある赤ちゃんを殺して、それをスプリング・ボードに、社会の通念とは絶縁した「新生活」に跳びこむこと」を希望し、「意識のはっきり成長せぬ段階の赤んぼうの死は、死の苦しさということでは一等耐えやすい」と弁解する。タケチャンの言い分は、明らかに現実社会の障害者差別をより増強したものに違いない。しかし「僕」はタケチャンの障害児殺しの勧めに逆行し、「不幸な出産」を受け止め、障害児との共同生活を図る。作中では、障害児と正面から向き合うことを主題とした作者大江の別作『個人的な体験』が引用される。

《旧石器時代の人類の生き方においてすらも、ひとりの人間が生きているということ、生きたということは、取り消

されえぬ。そこから光をみちびいて見れば、現代のいかに悲惨な生にしても、当の個人の存在には、indestructibilityと呼ぶほかにないものがある。（中略）最初の子供が、障害を持って生まれてきた時のことで、毎日のように病院に通っては、保育器の赤んぼうを覗いていた際、不意にそう感じたのでした。――この哀れな一個の生きものがいる、ということは誰にも取り消せない。そうである以上、僕はこの子供とともに生きることにするし、かつはかれが生きていることを書き記すことにもしよう。》(22)

タケチャンは、「死後の虚無の想念に悩まされることはなく、肉体として虚弱で、ほとんど抵抗力を持たぬまま、たいした苦痛なしに生命を消滅させうる」ような赤ん坊の死亡を想像し、彼自身の暴力性を根拠に何度も「僕」を障害児殺しの方向へと誘惑する。だが「僕」は、どのような生命であれ、「人間が生きているということ、生きたということ」は抹消できないと反論する。たしかに、「僕」も障害児を「哀れな一個の生きもの」として規定したが、それと同時に、その存在自体が「誰にも取り消せない」という不可避的な事実をも見極めた。どんな人間であっても、どんな時代であっても、「取り消せぬ」という「indestructibility」という不滅な生命力をもっていることは、連合赤軍事件のメンバーへの評価と直結している。

北山敏秀は『個人的な体験』における障害者の赤ん坊を、主人公を「社会的に位置づけることを妨げる他者」、または主人公の「社会的正統化の失敗」として評し、主人公が赤ん坊を育てることを選ぶことを、「社会の主流にある言説」を「差異化」して「揺さぶる」(23)こととして帰結した。それを本作と繋げれば、タケチャンの言い分が「社会的正統化」を擁護する「社会の主流的な言説」であれば、障害児もまた「僕」にとって、同じく社会の正統的規範を逸脱する「他者」と「失敗」となるだろう。だが障害児の場合、こういう正統的規範に対抗する術を持っていないゆえに、疎外されて周縁化された弱者でもある。「僕」が「子供とともに生き」、「かれが生きていることを書き記す」のは、弱者としての「他者」を迎え入れ、彼らを庇護するためよりほかならない。

また、本作には人間と動物との関連性を抽出し、人間という中心的な特権を解体しようと試みるエピソードがある。地方で動物ショーをやるための場所で、動物への虐待と死体の投棄を目撃した「僕」は、それらの行為を思わず批判し、同情の意思を示す。

死んだ動物は、県の許可もなく、そこいらに大きい穴を掘って投げ込んでいる始末。病気の動物もゾロゾロいるのに、正規の獣医はいない。むしろ新しく入る「河馬の勇士」が、獣医の役割を期待されてすらいたのらしい……

――どんな悲惨な人間よりも、あれはひどい。動物だから人間より悲惨であたりまえというのならば、まちがいだ。動物に人間の自意識はないから、悲惨となると底なしに悲惨になる。猿のめずらしい種類が犬のように、それも狂犬かなにかのようにあつかわれていた。そうした批判をたてつづけにして、ガックリ黙りこんでしまったそうです。(24)

ここで現前させられるのは、「河馬」のイメージを推重する理念と背反するような、人間が動物に対して過剰行使している暴力が摘発される現場である。「死んだ動物」と「病気の動物」に対して、人間だったら決して許されない行為が施された。動物が「どんな悲惨な人間」よりもなお「ひどい」状況にいて、動物が人間社会のどん底に排除されて圧迫される。それは、人間は動物を自分の支配下に置き、自分で作った位階秩序で動物を規定することで、人間による搾取と危害と動物の「悲惨」さを「あたりまえ」のように正当化するからだ。

ここで動物への支配を健常者中心主義の視野で考察したスナウラ・テイラーの動物倫理を取り上げたい。テイラーによれば、「健常者中心主義は種差別主義と密接に絡まりあっているため、人間以外の動物がどのように判断およびカテゴリー化され、搾取されるのかを思考するのに欠かせない」。人間以外の動物は人間の「特徴および能力を欠くために、われわれの道徳的責任の外部に存在しており、よって人間が動物たちを支配し、利用することは許される」[25]のである。つまり、人間の動物支配の根源には障害者差別の健常者中心主義が存在している。人間は自らの能力や力量をもって、動物を凌駕し、自身と動物との境界線をより強固なものにした。障害者と人間以外の動物を抑圧する共通のシステムとイデオロギーは、こういう強弱秩序に基づく思考回路である。

実は、本作の作中でも提示された大江の論集『生き方の定義再び状況へ』においても、人間のみの特権性を解体し、異種との共存を提唱する論考が見られる。

もとより人類の生命が重要であるように、動物や、鳥に虫、魚、微生物の生命は重要です。僕としてはそれに樹木や草の生命も、とつけ加えたいと思います。（中略）人間が生きることができ、動物や、鳥に虫、魚、微生物、そして樹木や草が生きつづけうる地球的環境をたもたねばならぬ、という考え方にいたるのこそ、まともな筋みちだと思います。そしてすでにはじまっている破壊から、地球的環境を再生の方向にひき戻すこともふくめて、なんとか生きうる場所として保ちつづけるために、核状況の今日のありようを突き崩し、核権力の独占者らを、核の廃絶にいたらざるをえぬ方向へ追いつめる、世界的な世論をつくることこそ必要なのです。そこに今日のヒューマニズムに立つ想像力の到達点があると考えると、僕は全的滅亡を見すえつつの対話が、いま武田泰淳との間にありうるとして、あの優れた認識者・預言者だった人の魂に答えたいと思います。[26]

大江は、地球全体の「破壊」と「再生」を論じる際に、「人類の生命」と「動物や、鳥に虫、魚、微生物の生命」と「樹木や草の生命」を等置させ、生命を人間だけの枠組みに格納するのではなく、人間以外の生き物をも視野に入れ、ある種の「新しいヒューマニズム」を模索しようとした。そしてわれわれの生きる環境において、単一的で特権的な種というよりも、複数の異種との共存を維持できるような存在としての、人間の役割が更新されている。

こういう人間とそれ以外の一切な他者的存在との共存こそが、「すでにはじまっている破壊」から、「再生の方向にひき戻」し、「核状況」と「核権力」の局面を打開する鍵である。

以上は核時代という公的な視座からの検討であれば、一九八五年二月の大江による障害児への言説は私的な視座からの検討といえる。大江は、障害児を主題にした短編連作集『新しい人よ眼ざめよ』への感想として、「死と再生の主題は、もちろん時代・世界の死と再生という課題に展開するわけですが、根底には、ここに個人的な感懐を語ったとおりに、自分の個人としての死と再生への思いがあります」[27]と述懐した。ここでは、〈死と再生〉が「時代・世界」の審級から「個の再生」への移行、あるいは公私の領域での双方向の連動によって示されている。そして、この記述の原点である障害児の問題自身は、異質な他者との〈共生〉を照射している。

テイラーが障害が「差異のカテゴリーを構造化するのに中心的な役割を果たし」、「人種、階級、セクシュアリティ、そしてジェンダーといった諸イデオロギー」といった相互的に「意味をかたちづくる」[28]と主張した。そういう説に従えば、人間社会を包摂し、それよりもっと広範的な自然界でも、障害者問題に埋められた弱者の生命倫理も、人間だけでない異種たちの差異と統合して相互機能しているのではないだろうか。本作はこうして、人間社会における弱者たち、とりわけ連合赤軍女性、障害者息子と動物を庇護し、支配や排除ではない〈共生〉の道程を図っている。

四、核時代のエコクリティシズムからポストヒューマニズムへ

大江文学における〈死と再生〉というモチーフは、一九八〇年代以降の大江研究[29]でよく指摘されているように、この問題は大江の複数の作品にわたって検討されて、決して等閑視することのできない領域である。今井清人によれば、死あるいは死のメタファーといったものは、「大江健三郎の小説のすべてにみられる」が、それは「たんなる日常の生の終焉ではなく、むしろ「我々の日常が隠蔽してきた個体の限界と矛盾を露呈させる」一方で、「自己放棄するという倒錯、あるいは自己の生の確認のために自殺・自己破壊するという背理」へと発展する。そして今井はそこからの「再生」というものを、「このように限界と矛盾を露わにされた個を越える試みとして要請された」と論じた[30]。たしかに、その問題はよく個人的な体験による反映として捉えられるが、八〇年代から九〇年代にかけての大江の言説を見れば、それは米ソ冷戦期間中における核実験の多発という時代状況とかかわり、時代的な意義を付与されるゆえに、広範的な解釈の可能性を示すようになる[31]。作中では、原爆体験に対する「僕」の講演は以下のようである。

> 世界を覆う核権力は、西のそれも東のそれも、巨大をきわめています。広島・長崎の被爆者たち、かれらと協力する市民・学生の数も力も、それにくらべれば、小さいものです。しかし僕は小さな野草の力が巨大な樹木の力によく対抗しうることを夢見る人間です。レッドウッド・スミレの

学名はViola sempervirensでした。Sempervirensはレッドウッドの学名からきいているはずですが、このラテン語の意味はevergreen。そこで自然に浮かんでくるのはever-green violetという呼び名です。「広島週間」の思い出のために、かたちの良いレッドウッド・スミレを採取し、今度はうまく乾かして、標本紙にはevergreen violet, santacruzと書きこもうと思います。[32]

世界レベルの「核権力」と対峙する脆弱な人間の姿は、「野草の力が巨大な樹木の力」に対抗する形象に擬せられる。レッドウッド・スミレの学名の意味は、「evergreen」、「evergreen violet」、「evergreen violet, santacruz」という三つの単語で表現される。この三つの単語において共通して反復されるのは「evergreen」、すなわち植物の屈強な生命力を表す常緑という言葉である。植物を含めた自然環境への描写は大江文学全般における顕著な特徴として、しばしば中国側の先行研究でエコクリティシズムの観点とかかわされて提示される。

趙春秋によると、大江が描く自然が多くの文学作品が自然を「人間や社会の引き立て役」と異なり、「自在で原始的で非人工的」なものとして、「自然と人間の平等」[33]意識を内包する。馮立華は「頭のいい雨の樹」と『晩年様式集』における「樹」のイメージを取り上げ、核の放射能が「樹」の脅威であることを分析した。馮は大江が『広島の「生命の木」』で記した論調[34]を引用し、「国家の境界を越えて人類全体の生態に関心を向けている」大江の反核思想[35]を述べた。

伊藤詔子によれば、エコクリティシズムは世界総体をネットワークとし、「文化と自然を二項対立のような単純な関係」ではなく、「両者の相互作用」を重視する。エコクリティシズムは「自己を世界の一部と感じ」、「地球的全体性の回復のなかで自己を取り戻しエコロジカルなアイデンティティの確立をめざす」意味で、「一種〈希望の批評〉としての特質が潜んでいる」[36]。大江文学が核時代の制度と自然環境をともに検討し、人間と自然の境界を抹消するような仕組みはエコクリティシズムの批評性を呼び寄せたのも当然である。

そうだとすると、人間はどのように従来の確固たる分断を解除し、〈共生〉の道程を模索するのか。その問題を解くために、作中で引用された、一九七七年の小原秀雄の著書『境界線の動物誌』の「河馬」研究に対する「僕」の評述を見てみよう。

《河のなかに緑の植生のかたまりができると、河は氾濫する。水中で盛んに活動する河馬は、植生のかたまりに通路を開き、水の流れを回復させる働きをする。河馬にはまた、ラベオという魚がまつわりついており、河馬が陸上からおとしこむ植物や、河馬自体の糞を食べる。そのようにして河馬は、アフリカの自然の生物の、食物連鎖に機能をはたしている。小原氏の記述に僕は誘われる。ラベオと呼ぶ魚の群をまつわりつかせつつ、水流をとざす緑の植生のかたまりに通路をあけるべく、猛然と泳ぐ河馬のありようが、有用なものとして排泄されるそいつの糞便ともども、人を励ます眺めではないか？　おそらくは気の荒い牡の若い河

馬に噛みつかれるほどまぢかから、活動を見まもっていた者にとって、河馬の働きはいかにも勇ましく奮いたたしめるていのものではなかっただろうか？》[37]

「僕」の記述を鑑みれば、「河馬」は「水の流れを回復させる働き」をし、「糞を食べる」など、「自然の生物の、食物連鎖に機能」し、自然の全体における物質循環、さらにいえば異種の〈共生〉に貢献している。小原秀雄の原文では、「自然界の中にその動物がいること、くらしていることはこうした様々な自然の中での生物の食物連鎖にいることになっている。これは生物界の中に生物がいる、生物が生物界を作っているというしくみの一部なのである」と記される。こういう「食物連鎖」の中枢役を果たす「河馬」を、小原が「巨大な水と陸との境界にある動物」[38]、つまり自然界の隔てりを横断してリンクする越境的な動物として認定する。この段落が第二章と第八章の末尾において二度も作者に意識的に引用され、物語を収束するための結末ともされているという点からみれば、「河馬に噛まれる」というイメージの記号性を読み解くための核心的な手がかりだと推定できる。

小原の記述に対して、「僕」は「河馬の勇士」の批判どおりに、僕も二十年ほど、時に自分内部の河馬に噛みつかれて、ワーッ、ワーッと叫びながらも、なんとか生き延びてきたのだった」と告白し、「河馬の勇士」と同じく「河馬」の生態を内面化することで、自らの「生き延び」る術を発見しようとした。「気の荒い牡の若い河馬に噛みつかれる」という画面は一見、動物と人間を恣意的に組み合わせ、標題のイメージを繰り返して表面化するまでのように見えるが、よく読めばそこには「勇ましく奮いたたしめる」若者の気質を「河馬」に託し、動物の不変的な表象をより可変的で多義的に変容させる擬人法が伏在している。

矢野智司は動物と人間とのかかわりを取り結ぶ技法を「「生の技法」としての擬人法（anthropomorphism）」と呼び、それを「動物や異類の存在者がもつ異質性を、理解可能な同質性へと変換させる魔術的な手法」[39]だと理解した。「河馬」を人間化し、その青年のような生態を描くことは、動物と人間の「同質性」を強調すると同時に、その同一化あるいは平等化を根拠に両者の差異をより受け入れやすいものにした。だがそれだけでなく、「河馬の力をさずかった」「河馬の勇士」に対する叙述も、そういう擬人法が逆転するような逆擬人法の試みとして読めるのではないか。矢野による「逆擬人法という名の擬人法」は、「動物が人間の世界に回収されるのではなく、人間が動物たちの世界へと開かれ」、人間を「世界化」かつ「脱人間化」[40]をもする。そういう意味では、「河馬の勇士」は人間の自己解体や脱人間中心主義の象徴性を帯びることになり、ただの比喩にとどまる呼称ではない。上記の小原の論述とかかわれば、そもそも「河馬」という動物は自然界の中枢役を果たす点で越境的な動物である。それをさらに動物と人間の中枢役として物語化する作者の意図は、動物と人間の双方向的な連動を読者に彷彿させ、核時代の人間のありようを再考させるために違いない。

ケアリー・ウルフは、「動物学と障害学はともにそのモデル自身の限界性をわれわれに示し、われわれにこれらの倫理的かつ政治責任的な問題を私が提示したポストヒューマニストの立場

から再考することを要請する。その「ポスト」をきっかけに、人間と非人間の異なった生命様式におけるあらゆる共鳴、類似性、尊重は、リベラルヒューマニストたちにとって解釈不能な形式で理解される」[41]と述べた。それは文学テクストが「人間が非人間を含むがゆえに人間であること」[42]を示し始めたというプラモッド・ナヤーの主張と響き合っている。ポストヒューマニズムは人間と人間外部の生命様式との〈共生〉と、人間内部の異なった生命様式の〈共生〉をともに示し、つまり人間全体および人間と非人間の全体におけるあらゆる差異を肯定的に承認した。本作においても、まさにこうした人間と非人間との連動によって人間内部における強者と弱者との〈共生〉、また弱者たちの〈共生〉が示唆された。

五、結論

本稿は、大江健三郎の短編連作で構成された長編小説『河馬に噛まれる』を研究対象に、先行研究に見落とされがちだが、重要視されるべき〈共生〉の主題に焦点を絞り、作者の同時代言説および外延的な理論を援用しつつ、全体的な解読を施した。まず、「河馬」のイメージと連合赤軍事件との関連性、および多義的な人間像に埋められた政治的動物の属性に注目し、そういう人間たちとの多重な和解を解いてみた。続いては、連合赤軍女性、障害者息子と動物といった人間社会の弱者を取り上げ、それらの生態に貫かれた障害者学の生命倫理と〈共生〉への模索を分析した。最後に、大江文学に対する生死の問題、および核時代のエコクリティシズムをきっかけに、本作が動物と人間との境界を解消することで、人間の自己解放および人間と非人間とのあいだの複層的な〈共生〉を論じた。

一九八〇年代という時点は日本にとって、高度経済成長を遂げた十年後である一方で、東西冷戦を背景に世界中で終末論が隆盛した時期でもあった。郷原佳以はこういう時代の文脈を「オーウェルのディストピア小説が舞台に設定した年を現実に迎え、人々は、科学技術の急速な発展と裏腹に世界は確固とした共通の目標を失い、末期的な状態を呈している」[43]と読み解き、一九五〇年代から続いてきたそういう状況に、核脅威の課題が切羽詰まってきたと指摘した。だが、核戦争がむろん人間にとって絶大な恐怖であると同時に、人間外部の動物や植物に対しても全く同じである。この時代背景に本作を置き直して考えると、核脅威のもとでの人間が弱者であると同じように、赤軍内の女性も「僕」の障害児も動物ショーの動物も、強者からの暴力に抑圧された存在である。

動物と人間との関係をきっかけに、本作は連合赤軍事件や核脅威などの複数の暴力の様態を一挙に取り上げ、そういう状況下の弱者たちの〈共生〉をめぐる問題系を断片的に語りながら整合し、人間の本質と発展にとって根源的な追究を行った。大江が「最初に書いた、この宇宙、世界そして人間の社会、個の内部へと耳を澄まし、眼を見開くようにして、そこをみたしている沈黙と測りあう言葉を探す自分、というところに立ち戻る」[44]と自己解釈するように、「宇宙、世界」から「人間の社会、個の内部」へと、つまり巨視的から微視的な視点への移動をも

とに、〈共生〉をめぐる諸問題が複層的に表現された。

【注記】

1　山田有策：「『河馬に噛まれる』事実と虚構」、『国文学　解釈と教材の研究』三五（八）、一九九〇年七月、八五頁。

2　無署名：「時代と社会に根差す　野上弥生子氏　白寿記念の特集　大江健三郎氏『河馬に噛まれる』」、『読売新聞』一九八五年五月二四日。

3　無署名：「連合赤軍事件との格闘　大江健三郎著『河馬に噛まれる』」、『読売新聞』一九八六年一月一三日。

4　白川正芳：「《大江健三郎『河馬に噛まれる』他を読む》〝文体の魔〟と新技術」、『三田文学』［第3期］六五（五）、一九八六年五月、一八五頁。

5　筒井康隆：「新しい自己照射の試み――大江健三郎『河馬に噛まれる』」、『文学界』四〇（三）、一九八六年三月、二九九頁。

6　竹田青嗣：「書評　世界イメージを耕す困難　大江健三郎『河馬に噛まれる』」、『群像』四一（三）、一九八六年三月、二五九頁。

7　牛久保建男：「「悲傷感」をささえるもの――大江健三郎『河馬に噛まれる』をめぐって」、『民主文学』（二五二）、一九八六年一一月、一二六頁。

8　無署名：「時代と社会に根差す　野上弥生子氏　白寿記念の特集　大江健三郎氏『河馬に噛まれる』」、『読売新聞』一九八五年五月二四日。

9　無署名：「『河馬に噛まれる』大江健三郎著　新しい若者の生き方」、『毎日新聞』一九八六年二月三日。

10　上村文人：「大江健三郎『河馬に噛まれる』論――連合赤軍事件との関係性を中心に――」、『都大論究』（四九、二〇一二年六月、三七頁。

11　尾崎真理子：「青年の夢想と酷たらしさ」、『大江健三郎全小説11』、二〇一九年七月、六八四頁。

12　大江健三郎：『河馬に噛まれる』、『大江健三郎全小説11』、講談社、二〇一九年七月、七四頁。

13　「ぼくはすでに「証拠」にされている『自己批判書』のまきちらした毒素を早急にはき清めなければなりません。それを通じて『自己批判書』のデタラメさ、反動性、反階級性、反マルクス・レーニング主義の暴露を通して、権力によるその利用を粉砕する中で、自己の根底的な自己批判を行なっていかねばならないと思います」である。同一二、七三頁。

14　そのことは一九八四年六月に新泉社出版された、森恒夫の『銃撃戦と粛清　森恒夫自己批判書全文』の「解説」にも提示されたことがある。作品分載の期間と『銃撃戦と粛清　森恒夫自己批判書全文』発行の時期から考えると、大江は初出の「河馬に噛まれる」執筆時には『銃撃戦と粛清　森恒夫自己批判書』を読んでおらず、その後の連作連載中に、同書を読んで一九八五年三月出版の「河馬の昇天」に取り入れたと推定できる。高沢皓司：「解説」、高沢皓司編、森恒夫：『銃撃戦と粛清　森恒夫自己批判書全文』、新泉社、一九八四年六月、二九一頁。

15　森恒夫：「1973.1.1　坂東国男宛書簡」、高沢皓司編：『連合赤軍の軌跡　獄中書簡集』、一九七四年三月、一一四～一一五頁。

16　同一二、一四四頁。

17　『厳粛な綱渡り』に収録された「性の奇怪さと異常と危険」一文において大江は、自らが作者として意識的にかつ独自的に「性的なるもの」を創作に取り入れ、読者を「性的な甘い匂いのする眠りにさそうかわりに、苛酷な違和感にみちた覚醒へとひきずりだすための工夫にすぎない」方法を明言した。同書の「廿世紀小説の性」と「現代文学と性」においても、大江が各国な現代小説と性の関連性を幅広く網羅し、第二次世界大戦後の「性的

な言葉」「性的イメージ」や「二十世紀人間の孤独感と性の結びつき」といった実存的な性的表現力を追究する意思を述べた。大江健三郎：『厳粛な綱渡り　現代日本のエッセイ』、講談社、一九九一年一〇月。

18　ブシマキン・バジム：「大江健三郎の〈政治的人間〉と〈性的人間〉の止揚」、『人間社会環境研究』（二五、二〇一三年三月、一五八～一六〇頁。

19　ディネシュ・J・ワディウェル著、井上太一訳：『現代思想からの動物論　戦争・主権・生政治』、人文書院、二〇一九年一〇月、一〇三頁。

20　同一二、九〇～九一頁。

21　連合赤軍党内のミソジニーを反映する典型的な例として、永田洋子が指導者と仰いだ男に強姦されたことや坂口弘との子供を中絶されたことが挙げられる。永田自身も最高指導者である森恒夫も女性性に対して嫌悪な態度を示した。上野千鶴子：『生き延びるための思想　ジェンダー平等の罠』、岩波書店、二〇〇六年二月、九一～一一〇頁。

22　同一二、一〇七頁。

23　北山敏秀：「「声のない」呼びかけを聴く――大江健三郎『個人的な体験』における規範への意識と、規範を差異化する身体――」、『社会文学』（四九）、二〇一九年、一六五～一六九頁。

24　同一二、一九二～一九三頁。

25　スナウラ・テイラー：『荷を引く獣たち　動物の解放と障害者の解放』、洛北出版、二〇二〇年九月、一〇七頁。

26　大江健三郎：「破壊していい最後のもの」、『生き方の定義　再び状況へ』、岩波書店、一九八五年二月、一一六頁。初出：『世界』（四六五）、一九八四年八月。

27　大江健三郎：「この項つづく」、『生き方の定義　再び状況へ』、岩波書店、一九八五年二月、二三六頁。初出：世界（四七一）、一九八五年二月。

28　同二五、四七頁。

29　たとえば、高野斗志美「大江健三郎著「同時代ゲーム」自由をめぐる死と再生の物語（読書室）」（『潮』（二四九）一九八〇年二月）、森与志男「神話的世界における死と再生――大江健三郎「いかに木を殺すか」を読む」、（『民主文学』（一三五）、一九八五年六月）、榎本正樹：「大江健三郎の〈キーワード〉　死と再生」、（『国文学　解釈と教材の研究』、一九九〇年七月）、川本三郎「芸術家の自死と再生――大江健三郎『取り替え子』（チェンジリング）を読む」（『文学界』五五（二）、二〇〇一年二月）、團野光晴：「〈戦後日本〉の死と再生：大江健三郎『懐かしい年への手紙』論」、（『金沢大学国語国文』（四六）、二〇二一年五月）などが挙げられる。大江自身も「小説・死と再生（小説は何処へゆくか〈特集〉）」（『群像』四八（一）、一九九三年一月）という一文で自己確認したことがある。

30　今井清人：「大江健三郎の〈キーワード〉　死と再生」、『国文学　解釈と教材の研究』三五（八）、一九九〇年七月、一三三頁。

31　たとえば、「核時代の日本人とアイデンティティー」（『世界』（四二二）、一九八一年一月）では、大江は核権力や核脅威に抑圧された「人間的悲惨の経験」を踏まえ、「核兵器の威力に対立しつづけ、決してその前に屈伏しないという態度」への展望を核時代を生き延びる「もっとも現実的な戦略・戦術論」とした。同じような意思表明は、「核状況のカナリア理論」（『世界』（四三二）、一九八一年一一月）や「核時代への想像力」、（『核時代の想像力』、新潮社、一九七八年五月）などの論からも見て取れる。

32　同一二、一五四～一五五頁。

33　赵春秋：《大江健三郎存在主义文学的生态批评》，沈阳师范大学学报（社会科学版），2010 年4月，第94页。

34　この本で記録された大江の主張によると、原爆問題をただ広島だけに制限するのは間違っている。問題の核心に突き詰めると、南京大虐殺の30万人、戦争中で死んだ百万のアジア人、挺身隊や強引に連行された人々、原爆の被害者全員、それらの人間を考慮しなければならない。大江健三郎：『ヒロシマの「生命の木」』、日本放送出版協会、一九九一年一二月。

35　冯立华：《生态批评视域下的大江健三郎：核，文学——以《晚年样式集》为中心》，《北方文学》，2019年12月，第61頁。

36　本作が書き始められた五年前の一九七八年に、ウィリアム・リュカートが「文学とエコロジー——エコクリティシズムの実験」という一文を発表した。それをきっかけに、エコクリティシズムが初めて批評の潮流として登場し、それまで人間中心主義的な文学研究を生命中心主義あるいは環境中心主義的なものへと移行させた。伊藤詔子：「緑の文学批評」、ハロルド・フロムら著：『緑の文学批評　エコクリティシズム』、松柏社、一九九八年一〇月、一〇～一三頁。

37　同一二、三八、一九五頁。

38　小原秀雄：「第三章　アフリカの旅　三　河馬のはなし」、『境界線の動物誌』、一九七七年六月、思索社、一六二頁。初出は『現代思想』一九七五年一月号から一九七六年一二月号まで連載されたものである。

39　矢野智司：『動物絵本をめぐる冒険　動物－人間学のレッスン』、勁草書房、二〇〇四年三月、八〇頁。

40　同三九、九二頁。

41　Cary Wolfe, *What is Posthumanism?*, Minneapolis: University of Minnesota Press. 2010. p127-128.

42　Pramod Nayar, *Posthumanism*, Polity press. 2014. p2.

43　郷原佳以：「黙示なき破局の寓話　核時代の脱構築」、『現代思想』四九（七）、青土社、二〇二一年六月、一七四頁。

44　大江健三郎：「小説家として生き死にすること」、『私という小説家の作り方』、新潮社、一九九八年四月、一九八頁。

付記：本稿は、二〇二一年七月二八日に担当した授業発表の原稿をもとに、度重なる加筆修正を行ったものである。

（九州大学地球社会統合学府博士後期課程二年）